

は第三紀を通して分布していたが、第三紀末に全て絶滅したと考えられよう。

Explanation of Plates III-IV

Plate III *Camptotheca kyushuensis* sp. nov. (No. 71225): A, cross section $\times 40$. B, tangential section $\times 100$. C, tangential section showing two series of crystalliferous elements in wood parenchyma $\times 200$. D, radial section showing two scalariform perforation plates with about 20 bars $\times 400$. E, radial section showing alternately arranged intervessel pits $\times 400$. F, radial section showing intervessel pits on two vessels $\times 100$. G, radial section showing circular ray-vessel pits $\times 200$.

Plate IV. *Nyssoxylon ishikariense* sp. nov. (No. 362001): A, cross section $\times 20$. B, tangential section $\times 100$. C, cross section showing an annual ring boundary $\times 40$. D, radial section showing scalariform perforation plates with numerous bars $\times 120$. E, radial section showing circular to horizontally elongated elliptical ray-vessel pits $\times 240$.

○新らしく日本に帰化したアメリカネナシカズラ(新称)について(浅井康宏)
Yasuhiro ASAI: On a North American dodder, *Cuscuta pentagona* Engelm., newly established in Japan

かねてから東京を中心とした各地の河原(河川敷)、堤防、海浜などに、ハマネナシカズラに類似の種類が多産し、これの所属について問題視されていた。

筆者自身も一昨年(1973)8月に静岡県下の新設道路周辺その他で、これと同様のものを実見し、生品について詳細な観察を加えることができた。一方、東京都府中市近傍の植物について鋭意調査を進めておられる飯泉 優、曾根伸典氏らは、1970年頃より多摩川流域での本属 *Cuscuta* 植物の異常繁殖状況に注目し、これをマメダオシあるいはハマネナシカズラとして取扱い、報告されていた。しかしながら曾根氏は、これらに対して更に一層詳細な検討を加えた結果、我国における既知種とも異ったものであるとの見解に達すると共に、筆者にその正確な検定と解決方を促された。

筆者も各地から寄せられた資料や生育分布状態、寄主ならびに現地における生品の観察結果などから、本種は本来の自生種ではなく、明らかに我国へ近年侵入した帰化植物であるとの確信を得、一応これをヨウシュネナシカズラと仮称し、関係諸氏に披歴しておいた。

しかし周知の通り、この属のものは可成り多くの種類を含み、しかも侵入源として最も関係深いと思われる北アメリカには類似の種類も多く、従って本種の我国での解決に少なからず危惧の念を抱かざるを得なかった。

そこで昨年 (1974), 筆者は渡米に際して我国各地から得られた資料を持参し, この難物 (?) の検定に取組んだ次第である。その結果, これを現在, 北米合衆国各地に広く分布し, またカナダの一部にも生育する *Cuscuta pentagona* Engelman, Amer. Journ. Sci. 43: 340 (1842) に当てておくのが妥当と考えるに至った (しかしながら植物体の色, 花部の構造などの点で, 末だ疑問が完全に氷解したわけではなく, いずれ彼地の生品とも更に充分な比較を行ない, 再検討を試みたいと思っている。従って将来, 全く別種と判定される可能性もあり, また全国的に詳細な調査を実施したならば, あるいは異った数種のものが混じて帰化していることも考えられる)。

本種は Field dodder の米名をもつ一年草で, 毎春, 種子から発芽, 生育する。茎は無毛で淡黄～淡橙色の糸状をなし, 寄主植物に左巻きに巻きつき, 寄主に接した部分には小さな吸盤を生じる。なお本種は, 彼地でもあらゆる種類の植物を寄主とする由であるが, 我国においても極めて多種多様で例えばマメ科のメドハギ, ヤハズソウ, マルバヤハズソウ, シロツメクサ, アカザ科のケアリタソウ, シロザ, キク科のカズザキヨモギ, ノコンギク, オオアワダチソウ, オオブタクサ, ブタクサ, アカバナ科のメマツヨイグサなどがあり, その他, 近くに生育する植物には何んにでも寄生するもので, ススキ, ササクサ, アシボソ, コブナグサ, スズメノカタビラ等のイネ科の

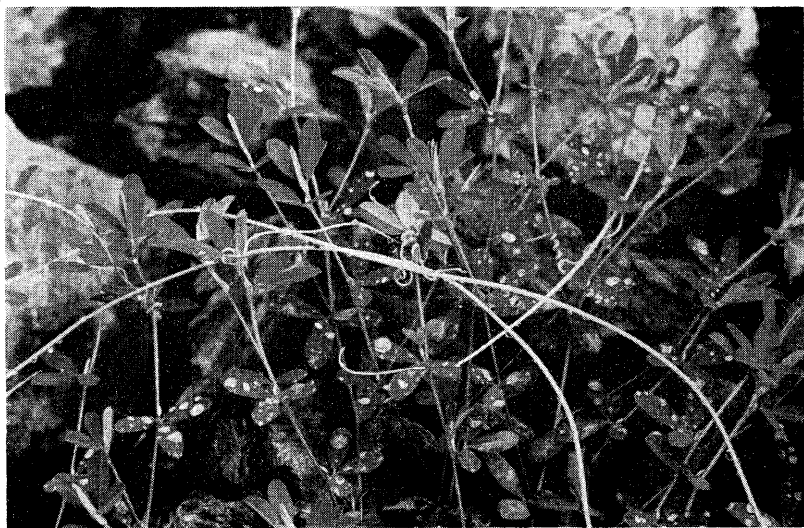


Fig. 1. *Cuscuta pentagona* Engelman on host plant, *Kummerovia striata* (Thunb.) Schindler, along a newly opened road, by the river bank of Tamagawa, Tokyo (Photographed by Y. Asai on August 23, 1973).

ものにまで及んでいて、その旺盛な生活力は一驚に価する。

そして初夏から秋にかけて、茎の各所から短柄のある総状花穂をなし、細花を塊状につける。花は白色を帯びたクリーム色で 2 mm 内外、萼は 5 片で基部で癒合、花筒を囲繞し、鐘状である。花弁は 5 中裂、萼裂片の約倍長を有し、弁端は尖頭で反曲する。雄蕊は 5 で、花冠裂片の間から突出する。花筒内面の附属体は糸状をなした櫛歯状に細裂し、花柱は 2 で多少外側方へ傾く。蒴果は横幅よりも短かく、完熟しても平



Fig. 2. *Cuscuta pentagona* Engelmänn in full bloom on *Miscanthus sinensis* Andersson and *Kummerovia striata* (Thunb.) Schindler (Photographed by Y. Asai at the same locality as fig. 1).

開せず、種子は 1 mm 内外。なお花弁などは、蒴果が熟しても残存する。要するに本種は、一見してハマネナシカズラに似ているが、生育地や寄主を選ばず、雄蕊が花冠裂片間から突出し、弁端が外曲することや花筒内面の附属体の形状などによって、我国の既知種や北アメリカなどの類似種と明瞭に区別できる。

ともかくこの種は、近年、我国へ渡来したいわゆる帰化植物の中でも顕著なものの一つで、可成り古い侵入歴を有するものと考えられる。

また、その侵入経路は恐らく北アメリカからの輸入穀物（米、麦、大豆など）や緑化あるいは砂防用種子中の夾雑種子に由来するもので、オオブタクサ、マメアサガオ、アメリカアサガオ、アメリカキンゴジカ、アレチウリなどと規を一にするものと思われる。なお本種は冒頭にも述べたように、既に各地でハマネナシカズラ、その他本属の類似種と混同あるいは誤認されている可能性がある。従って現在、長年にわたる本種の観察者の一人である曾根氏の言のように、恐らく生育期には“中華そばを草地にぶちまけたような異観”を各地に展開せしめていることが容易に想像され得る。このことは本種の原産地での分布域（北米合衆国の太平洋岸を除く全域に生育し、コスモポリタンの要素をもつ）を考慮に入れても充分首肯され得るところで、その極めて良好な結実及び発芽率と相まって、恐らく東北地方から九州に至る各地に広布していることと思考する。

因みに本種の学名には、現在 *Cuscuta pentagona* Engelman が適用されるが、しかしこれを花の大きさや萼片の形状などによって var. *pentagona* 及び var. *calycina* Engelm., Amer. Journ. Sci. 45: 76 (1843)—*C. campestris* Yuncker, Mem. Torrey Club 18: 138 (1932) 等に細分する見方もある。しかし彼地の文献などを広く参照検討すると、これらには所謂中間形が存在し、従って明瞭に区別され得ないとし、現在、これら全てを合一するのが一般的見解である故、筆者もこの考えに基づき一種として扱っておきたい。

また和名は、前述のように最初ヨウシュネナシカズラなる名を仮称したが、その後本種の正体も一応明瞭となった故、その原産地に因んでアメリカネナシカズラと呼んだ方が、より適切と考えるに至ったので、これを本種の標準和名として提唱したいと思う。

終りに、本種の検討に際して間接あるいは直接的にお世話になった関係諸氏、特にニューヨーク植物園の小山鐵夫博士を始めとする北米合衆国各地の主要ハーバリウムの Curator の方々に対し衷心より厚く御礼申し上げると共に、資料蒐集ならびに生育地での観察等に当り便宜を与えられた 曾根伸典氏ほか 多摩川流域のフロラ研究者各位、及び横浜植物会の村上司郎、秋山 守両氏に 深甚なる謝意を表したい（1975 年 2 月 5 日稿）。

（東京歯科大学）

Summary The present paper confirms the evidence of recent introduction

of North American *Cuscuta pentagona* Engelm. in Japan, where it has thus far established in such habitats as river beds and banks. Assuming from the fact that this weed is always forming a large, rather vigorously expanding community (Figs. 1 & 2), it seems possible that it will eventually become a noxious naturalized element in Japan. The seeds of this weedy parasite have apparently entered mixed with imported soy beans and other grains such as wheat.

○A new variety of *Aconitum laciniatum* from Nepal (*Aconitum* of the Himalaya III*) (L. A. Lauener) L. A. ラウエナー: ネパール産トリカブトの一新変種

Aconitum laciniatum (Brühl) Stapf var. *fractiflexum* Lauener, var. nov.

A typo caulibus fractiflexis inflorescentiis compactioribus petalis staminibusque glabris nec pilosis differt.

E. NEPAL. Chintapu, 27°06' N, 87°55' E, 2800 m, forêt, lande, fl. bleu sombre, 1.50 m, 29 ix 1971, Dobremez 1250 (holo. BM).

The forthcoming publication of the "Enumeration of Flowering Plants of Nepal" makes it desirable for the above specimen to be named. It was originally determined as *A. spicatum*, probably in view of its compact inflorescence, but it has a closer affinity with *A. laciniatum*.

Although Stapf described the stem of *A. laciniatum* as erect, stiff or flexuous, the stem of the Dobremez specimen is noticeably zig-zag, a quite common feature in *Aconitum*. The leaves are lacinate as in the species but the teeth of the laciniae are more acuminate giving the leaf an appearance similar to that of *A. potaninii* Kom. from Szechuan. The inflorescence of var. *fractiflexum* is more compact and has a spreading indumentum instead of the curved adpressed hairs of the species. The petals and stamens are glabrous, as in *Stainton* 6577 which has been referred to *A. laciniatum* (see Notes R.B.G. Edinb. 32, 413: 1973), but the summation of all the differences of the specimen collected by Dobremez justifies some taxonomic distinction from the typical species and it is therefore given varietal recognition. (Roy. Bot. Gard., Edinburgh, Scotland)

* Notes R.B.G. Edinb. 25: 1-30 (1963); op. cit. 26: 1-10 (1964), 32: 411-414 (1973).